



他にも「日本」とつくものがありますよね、例えば「日本書紀」。これは国史です。でもあれが中国の影響を色濃く受けていることは誰でも知っています。それを真似したと取られてしまえば、そうなのかも知れないけど……。そういう論理というのは一見正しいようで、実は人間とネズミは同じものだと言っているのと同じことだと思いませんか。僕が、将棋は日本人が発明したと言ったのは、こういう意味なんです。日本の誰が始めたのか知りませんが、日本将棋には日本人による創作上の分岐が明らかに見えるんです。つまり、将棋は日本固有の発明だと言ったって間違いじゃないし、むしろ日本固有の文化だと言わなければいけないんです。

文化の交流・影響は対等性を持って初めて成立する (明石)

だからどこで最後の分岐がされたのかということを明確にすることが、すべての文化の発祥を捉えることになるんだと思います。本来「鑑定」というのはそういうことであって、分岐をどこに置くかということと目筋が決まってくるんだと思います。

どうもこのところの文化論というのは、いつも何か、その分岐点の線引きが成されないままに議論されていて焦点がずれているんですよ。

「日本的なもの何だ」ということを突き詰めるには、分岐をどこにするのかということを決めることです。そこで初めて日本の文化が語れるんだと思います。

細文・弥生を念頭に置き、同時代に当たる中国の秦の始皇帝の物なんかを見ると、あまりにもレベルやポリウムが違いすぎていて、当時の日本があつた文化の影響を受けたとは思えないんです。当時の日本では中国文化の影響を受けきれないですよ。影響を受けるということは、ある意味で対等性を持つということですからね。

日本が中国と対等性を持つのは、やっぱり聖徳太子の時でしょう。「日出ずるところの天子、書を日没するところの天子に」という一文にみられるように、あそこで初めて対等という意識が生まれて文化の影響ということが見られるわけです。対等だからこそ遣隋使・遣唐使というものが派生していくんだと思います。

日本が中国の影響を受けたということは、厳密な意味では遣隋使以前は無いです。考えて入ってきたというだけのことには過ぎません。このレベルのことを影響とか交流といってしまうのは誤りだとも思うんです。そうじゃないと際限の無いことになってしまふ。

僕が非常にくだらないと思うことの一つに前方後円墳に関する論争があります。前方後円墳はどこからの影響とか、何故こんな形になったとか、こんなことが色々言われていますが、前方後円墳は純粹に日本のものですよ。これは中国の書物に「天子の墓は上円下方」とあつたのを日本が取り違えただけのことなんです。上円下方、というのは本当は立体的なことで、上が円墳で下が方墳だという意味なんです。これを日本人は実物を見ずに書物で読んだので、(上円下方)を平面に並べてしまった、これが前方後円墳の謎の正体ですよ。

※5、始皇帝
戦国の七雄の一つ秦の第31代の王。紀元前221年に中国の初統一をなし、自ら始皇帝を名乗る。秦は統一後わずか11年で滅びるが、中央集権制度の採用や万里の長城建設など後代への影響は大きい。始皇帝の陵付近から発見された等身大の兵馬俑は、当時の文化を知る貴重な資料となっている。

明石散人・高橋克彦：日本史鑑定，徳間書店，1999.1.31.
前方後円墳についてのきっかけを与えてくれたのであるが、論法はかなり乱暴で、「天子の墓は上円下方」の出典を明示してくれないと…
但し、明石散人、高橋克彦の両氏には他の書物でもお世話になっていて、一概に無視できない存在なのが悩ましいところです。

日本書紀が 抹殺した 古代史謎の 真相

河出文庫

9 前方後円墳を喜んで造っていたのは本当か

巨大な前方後円墳は天皇権力の象徴なのか

ヤマト建国後の王には、強い権力が与えられたと長い間信じられていた。その原因のひとつは、巨大な前方後円墳を造営していたからだ。しかも、前方後円墳は、三世紀から七世紀初頭まで造られ続けたから、ヤマトの王の権力を信じてしまったわけである。三世紀に成立した前方後円墳は、ヒエラルキーを形成した。まず、ヤマトの大王がもっとも大きな前方後円墳を造営する。各地の首長が、大王と同じ形の前方後円墳を造るとしても、規模は縮小して造られた。また、前方後円墳を造らせてもらえず、前方後円墳や方墳、円墳を造る首長たちも存在した。前方後円墳を造ることは、特権でもあったのだ。だから、前方後円墳はヤマトの王家の権力の象徴と考えられていた。

しかし、これは大きな誤解だ。そもそも前方後円墳の造営を民がいよいよやらされてきたのなら、約四百年の間、前方後円墳体制が続いたとはとても思えない。前方後円墳造営はお祭りであり、地域ごとの見栄の張り合いであるとともに、治水、地域開発の意味合いも兼ねていたのではなからうか。

『日本書紀』崇神十年九月条に、箸墓造営にまつわる記事が載っている。御諸山（奈良県桜井市の三輪山）に祀られる大物主神の妻となった倭迹迹日百襲姫命の物語だ。

大物主神はいつも夜に倭迹迹日百襲姫命の元にやってきた。だから倭迹迹日百襲姫命は、顔を見たいと、昼間にやってきてほしいと懇願する。すると大物主神は、明朝、櫛笥（櫛を入れる箱）に入っていると告げる。言われたとおり箱を開けると、美しい小蛇が入っていた。倭迹迹日百襲姫命は驚き、叫んでしまった。大物主神は恥じて、大空を踏みとどるかせ、御諸山に帰っていった。倭迹迹日百襲姫命は悔いて尻餅をついた。その時、箸でホト（女陰）を突いて亡くなってしまった。こうして倭迹迹日百襲姫命のために墓が造られた。昼は人が、夜は神が造った。大坂山（奈良県香芝市穴虫。二上山の北側）の石を運んだ。山から墓に民が並んで手渡しした。時の人は、歌を詠んだ。

大坂に 継ぎ登れる 石群を 手通伝に越さば 越しかてむかも

今風に訳すと、つぎのようになる。

「大坂から石を運ぶなど、できないと思っているだろ。いやいや、人が並んで運べば、不可能も可能になるのだ」

人と神がいっしょになって墓を造り、嬉々として働いている。だから、これは祭りなのだ。諏訪大社（長野県諏訪市、茅野市）の御柱祭も、山から里に大木を運んでくる作業は、労働として考えれば搾取だが、死人が出てみない、喜んで祭りに参加している人間の、おかしな習性なのだ。

ヤマトの纏向で誕生した前方後円墳は、首長霊や首長一族の祖霊を新たな首長に引き継ぐ儀礼を行なう場だったとする考えが、定説となっている（近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波文庫）。しかも、ヤマトの王の祖霊を頂点にして、各地の首長は前方後円墳を造り、同じように儀礼を行なうことで、擬制的にヤマトの王家と同祖同族関係を構築していたという。さらに、首長は、死んで、霊になっても民を守るために働かされたという。だからこそ、多くの人びとが前方後円墳造営に参加したわけだ。

関 裕二：日本書紀が抹殺した古代史謎の真相，河出文庫，2020.10.20.

最近、たまたま書店で手にしたマニアックな歴史読み物ですが、前方後円墳について記述した一節があり、近藤義郎著『前方後円墳の時代』が参考文献に挙がっていました。

かつて弥生墳丘墓・台状墓についての研究が進展しなかった当時には、前方後円墳の起源を中国に求めようとする考えが有力であった。しかし、墳丘を大規模に築成するということができないので、中国墓制の影響あるいは継承をもち、ただちに列島における前方後円墳の成立を考へることは、とうていできない。朝鮮からの影響についても、前方後円墳成立時において、南部朝鮮における墓制は今日なお明確でないため、比較はほとんど不可能といってよく、北部の高句麗の墓制もまた、前方後円墳のもつ諸要素と著しく異なるので、これまた列島の前方後円墳の成立を、今そこに求めることはできない。それに対して、すでに述べたように、弥生墳丘墓・台状墓の実態が近年しだいに明ら

二 弥生墳丘墓と前方後円墳

かつて弥生墳丘墓・台状墓についての研究が進展しなかった当時には、前方後円墳の起源を中国に求めようとする考えが有力であった。しかし、墳丘を大規模に築成するということができないので、中国墓制の影響あるいは継承をもち、ただちに列島における前方後円墳の成立を考へることは、とうていできない。朝鮮からの影響についても、前方後円墳成立時において、南部朝鮮における墓制は今日なお明確でないため、比較はほとんど不可能といってよく、北部の高句麗の墓制もまた、前方後円墳のもつ諸要素と著しく異なるので、これまた列島の前方後円墳の成立を、今そこに求めることはできない。それに対して、すでに述べたように、弥生墳丘墓・台状墓の実態が近年しだいに明ら

も、後円が後方形につくられるという点を除いて、同じように指摘できるが、これは、前方後円墳にくらべて常に相対的に小規模で、またほとんどの地域において前方後円墳に先立って廃絶するなど、前方後円墳に対してその意義は二義的である。

成立時の前方後円墳についてみれば、統一性は、そうした墳造成後の視覚的な外観にとどまらず、埋葬施設その他においても強く指向される。後円部のほぼ中央に大形の墓壙をしばしば地山を穿って深く掘りこみ、高野槨製の長さ数メートルに及ぶ長大な割竹形木棺に遺骸をおさめ、その棺を囲む板状割り石積み（石積みの）の堅穴式石槨を設ける。副葬品としては、鏡、若干の武器——刀・劍・鉾・鏃・甲など——と、農具・工具・漁具のうち二、三、ないし四、五種、ときに少数の玉類が加わるが、もともとも顕著なもの、鏡、なかならず船載の中国鏡である。古墳によって、副葬品の種類や数に多少の差はあるが、ほとんど後漢鏡と三角縁神獸鏡に限られ、多量副葬を指向するという共通性をもつ。そのうち後漢鏡は三角縁神獸鏡にくらべ少数で、副葬にあたり特別に扱われた形跡を示す例もあるが、後漢鏡を欠く例もあるらしい。

外表の墳丘斜面には、多くの場合、瓦石がふかれ、墳頂その他に飲食物供献の象徴形式化した土器がみられるのが普通である。それらは底部に焼成前から孔を穿たれた壺あるいはほぼ同形の壺形埴輪、器台形ないし円筒形埴輪であるが、京都府椿井大塚山古

前方後円墳はすでによく知られているように、当初、強い画一性あるいは統一性をもつものとして出現した。円形の主墳に前方部とよばれる台形壇部を付設したその墳形の造成は、何人かの研究者がそれぞれに指摘しているように、一定の計画的地割設計図の存在を予想させるものである。個々の前方後円墳にあって、それ自体の規模、前方部と後円部の大きさや高さの比率、前方部の形状などにおける若干の差が存在することは、いまでもないが、そのような個々の差を越えて、前方後円墳としての墳形は、出現の当初からその廃絶に至るまで一貫している。これ以外の以下に述べる諸要素が、時期の下るにつれ、また地域や同族関係における位置にもよって、著しく変貌をとりていくのに対し、この墳形は、確固として不動であって、まさにこの墳墓型式を前方後円墳と呼称するにふさわしい。この点は、前方後円墳とほぼ同時に出現した前方後方墳に關して

一 成り期前方後円墳

第七章 前方後円墳の成立

前方後円墳の時代

近藤義郎 著



「みずからを歴史学と任じて久しい考古学が、その独自の資料のみを使って果たして歴史を復原・再構成しうるものかどうか。たゆまず積み重ねた発掘成果からの歴史叙述を試みた、記念碑的名著。農耕が成立した弥生時代から前方後円墳が造られた時代へ、日本列島における階級社会形成の過程を描き出す。(解説 = 下垣仁志)



青N129-1
岩波文庫

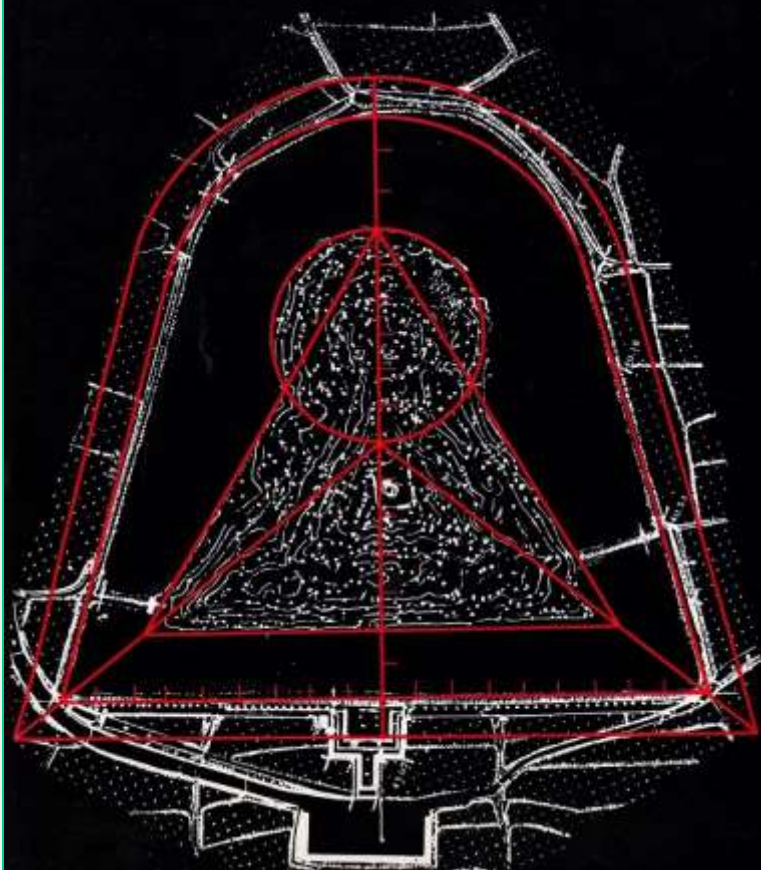
近藤義郎:前方後円墳の時代, 岩波文庫, 2020.2.14.

最近になって岩波文庫に加えられたようですが、書店ではなかなか目にすることがありませんでした。

先日、思い切って買い求め、読み始めはしましたが、どうも本のタイトルと内容とがミスマッチで、購入したのは失敗だったようです。

もちろん間違いではないのですが、著者は、読者に誤解を与えないようによく吟味して、内容に相応しいタイトルを付けるべきではないでしょうか。

前方後円墳 上田宏範



四 型式学的研究の基礎理論と展開

前方後円墳の
名の起り

「前方後円墳」とは考えてみれば、奇妙な名称である。文字どおりに解すれば、前が方形で、後が円形の古墳ということになる。いったい誰が、このような名をつけたのだろうか。わが国の古典には「山陵」、「山陵」、「延喜式」では「山陵」「墓」などとよばれていて、前方後円の特長な古墳の形を表現する字句はでてこない。むしろ民間でよばれてきた茶臼山、ひょうたん山、鐘子塚、二子山、銚子塚、車塚などが、その形の特徴をよくとらえている。茶臼は茶を挽くのに用いた臼であるが、その形がいかに古式の前方後円墳を思わせる。またひょうたん山という名も、ひょうたんを横にして半ば地に埋めた形を想像すれば、これもまた中、後期の前方部の大きく高くなった前方後円墳の姿に近い。私たちの先祖は、身近な品物になぞらえて、うまく名をつけたものである。

「前方後円墳」というしつかつめらしい名は、明治以降の考古学が学問的体系をもつようになって

からのものである。その背後には、江戸時代の書物『山陵志』が大きな役割を果たしている。この本は蒲生君平の著わしたもので、そのなかで、彼はこうのべている。上古の御陵は宮車の形をまねて前方後円とし、三段の壇をつくり、周囲に濠をめぐらしている。また造出にも着目し、これを車の両輪に見たてている。宮車をかたどったという点はともかくとして、これほど前方後円墳の特長をよく把握した文献はこれ以前にはない。明治以降のわが国の考古学者も、この形式の古墳の命名には困りはて、君平の前方後円を襲用したのである。

この形式の古墳は、隣接する朝鮮・中国にはみられない。わが国古墳時代に特有のものであってよい。世界一の大陵として有名な、仁徳天皇陵はこの代表的なものである。四世紀ごろから六世紀にかけて、畿内地方を中心とし、わが国各地でさかんに营造されている。

前期のものは、丘陵の先端や丘頂などに自然の地形を利用して築かれ、高い円丘の前面に低い方の前方部をつけ加えたものが多い。

中期となると、立地も平野に降り、周囲に水濠をめぐらし、墳丘の前方部はいちじるしく拡大され、それにつれて高さも増してゆく。

後期になるとこの傾向はさらにいちじるしくなり、高さ、幅ともに前方部が後円部をしのぐといった形となってくる。

上田宏範：前方後円墳，學生社版，1969.10.20.

ずっと昔に古本屋で買い求めていた本書が書棚の奥から出てきました。すっかり忘れていましたが、欲しかった本はすぐ身近かにあったわけです。

「前方後円墳」の命名者が江戸時代の蒲生君平で、明治期以降の考古学者がこの用語を用い始めたこと。

この様式は中国・朝鮮には見られないわが国古墳時代に特有のものであること。当面、知りたかったことはこれで充分でした。

なぜ前方後円墳に惹かれたのか… 昔、四国の高松空港と羽田をよく往復していたのですが、当時のプロペラ機YS11からは大阪平野の古墳群が、それこそ手に取るようによく見えました。その感動的な出会いを今も忘れることはありません！